

## 今週のメニュー

## ■トピックス

◇「下水道展 ‘12 神戸」に塩化ビニル管・継手協会が出展

## ■随想

◇新和環境株式会社の塩ビ壁紙リサイクル事業  
第1回 塩ビとの関わり

新和環境株式会社 代表取締役社長 近藤 亮介  
(一般社団法人日本壁装協会 環境顧問)

## ■編集後記

## ■トピックス

## ◇「下水道展 ‘12 神戸」に塩化ビニル管・継手協会が出展

下水道業界最大の展示会「下水道展 ‘12 神戸」(主催 (公社)日本下水道協会。後援 国土交通省、経済産業省、文部科学省、神戸市ほか)が、2012年7月24日～27日までの4日間、神戸市の「神戸国際展示場」で開催されました。

下水道展は、下水道に関する設計・測量、建設、管路資器材、下水処理など幅広い分野の最新技術、機器等を一堂に集めて紹介するものです。

展示会場では、震災に関連して地震に強い下水道を目指した管路や被災した下水道の補修を行う最新の工法などの展示が多く見られました。

一方で掘り返さなくても管の更生が出来る[管更生](#)の方法は、実際の小型モデルで製管機が動き実演していました。



管更生工法 製管機小型モデル

塩化ビニル管・継手協会のブースでは、耐震・長寿命・リサイクルとして、一般配管モデルや大口径の塩ビ管を展示し耐震コーナーに自在継手・塩ビ製可とうマンホール継手を使用した塩ビ耐震配管モデルを展示。耐震配管モデルは手を触れることができ多くの来場者が可動性を実感していました。



配管モデル

また、長期寿命のコーナーでは、名古屋市上下水道局



30年経過下水道管

管内で1980年に布設され30年を経過した塩ビ管を掘上げしたものを展示し、長寿命の塩ビ管を紹介していました。

リサイクルコーナーでは、リサイクル塩ビ管やその材料となる再生原料(廃塩ビの粉碎品)などやリサイクルシステムで受入れている使用済み塩ビ管のサンプルも展示し多くの来場者の関心を集めていました。

## ■ 随想

今回より、昨年末に塩ビ壁紙のリサイクル事業に参入した新和环境株式会社の代表取締役社長近藤亮介氏による、ご自身の塩ビとの係わりから同事業に参入された経緯、産廃業での生残り戦略などを「新和环境株式会社の塩ビ壁紙リサイクル事業」と題して6回に亘りお送りいたします。

### ◇新和环境株式会社の塩ビ壁紙リサイクル事業

新和环境株式会社 代表取締役社長 近藤 亮介  
(一般社団法人日本壁装協会 環境顧問)

#### 第1回 塩ビとの関わり

##### 1 はじめに

私は、2001年の5月まで、準大手ゼネコンの「環境」関連の部門で、工事現場から発生する建設廃棄物の適正処理、リサイクルを推進する仕事をしていました。90年代の終わり頃、ゼネコン各社の工事現場では、いわゆる「ゼロエミッション」の取り組みがさかんに行われていて、私が勤務していたゼネコンでも、「モデル現場」を選定して、それに取り組んだ。

当時、私なりに定義した「ゼロエミッション」は、

① 工事現場から発生する建設廃棄物を、すべて分別し、それぞれを、直接、「リサイクル施設」に直送し、リサイクルを委託する。

② 「混合廃棄物」として、建設廃棄物処理業者に処理を委託することはない。

というものである。現在、私は、建設廃棄物処理業者の社長をしていて、混合廃棄物の選別、処理、リサイクルをする「商売」をしているわけだが、その当時取り組んでいた「ゼロエミッション」は、今考えてみると、現在の私の「商売」を全否定するような取り組みであった。(もちろん、その当時は、10年後の自分が、今のようになっていることを想像すらしていなかったが)

##### 2 「塩ビ建材」と「ゼロエミッション」

その当時、建設廃棄物のリサイクル施設は、今ほど充実していなかった。既存のリサイクル先としては、

- ・木くず(チップ化)
- ・金属くず(スクラップ)
- ・コンクリート塊(再生砕石)
- ・紙くず・段ボール(製紙原料)
- ・石膏ボード(メーカーリサイクル)
- ・ロックウール吸音板(メーカーリサイクル)
- ・塩ビ管(製品原料化)

と、この程度であった。

ここで、「ゼロエミッション」に向けて、「課題」となったのは、塩ビ管を除く「廃プラ」であった。これのリサイクル先を確保しないことには、「ゼロエミッション」は達成できない。しかしながら、ちょうどこの頃、「高炉原料化」や、いわゆる「ゴミ発電施設」が相次いで出てきて、「非塩ビの廃プラ」をリサイクルすることができた。

そして、「最後まで」、リサイクルできないものとして、残ってしまっていたのが、「塩ビ床材」と、「塩ビ壁紙」であった。

途中、

(「塩ビ床材と塩ビ壁紙を使わない」、という方法でしか達成できないかもしれない)



と思いかけたころ、千葉に、「サーモセレクト方式」の「ガス化溶解炉」ができることを知った。そこならば、塩ビ床材と塩ビ壁紙をリサイクルできるということだったので、その施設がオープンするまで、それらの廃材を溜め込み、オープンを待って、そこへ向けて搬出することで、なんとか、ゼロエミッションを達成することができた。

### 3 「塩ビ壁紙業界」との関わり

莫大なコストと労力をかけて、工事現場における「ゼロエミッション」が達成できたので、日経新聞を始め、建設業界紙、環境業界紙に発表した。日経新聞には、「1面」に掲載してもらえたので、しかるべき反響があった。(図1)

しかしながら、「発表」の中に、

「塩ビ建材のリサイクル先の確保に、最後まで一番苦労した」

という内容を盛り込んだため、記事の表現によっては、

「“ゼロエミッション”に向けた障害は、“塩ビ建材”である」というように受け取られるものもあった。

さらに悪いことに、ちょうどそのころ、「ニュースステーション」で、「所沢ダイオキシン問題」が取り上げられ、その中で、

「塩ビの焼却が、とりわけ、ダイオキシンの発生に結びつく」という報道がされて、社会問題化している真っ最中で、「発表」がそれと結びつけられ、「塩ビ=ダイオキシン」であると、私が宣伝してまわっているように読める記事もあった。

私が勤務していたゼネコンの重要得意先に、塩ビ樹脂メーカーもあったこともあって、当時のV E Cの方々が、「塩ビに関する間違った認識を正したい」ということで、そのときから、私と「塩ビ業界」との縁が生まれた。

その当時、「塩ビ床材」については、概ね、「リサイクル」の目処がたっていたのだが、「塩ビ壁紙」については、実用的かつ現実的なりサイクルシステムが構築できていなかった。塩ビ壁紙業界の各種リサイクル委員会などに、私も参加することになった。

ゼネコン退職後も、引き続き、壁紙のリサイクルシステムの構築に協力することが求められ、「日本壁装協会」の「環境」を担当する顧問に就任し、現在に至っている。

(つづく)



図1) 2000年2月24日付日経新聞

## ■ 編集後記

日本選手の団体戦での活躍が目立ったロンドンオリンピックが閉幕した。毎日、深夜までオリンピック実況を観戦し、次の日に辛い思いをされた方々が多かったことだろう。

話は少し逸れるが、高齢者の身体活動レベルが低いほど認知症発症リスクが上昇することは良く知られている。この身体活動の内、「歩く速度」と「握力」が認知症発症レベルと相関しているという発表が、米国の国家的調査研究である「FHS」から発表された。つまり、「歩く速度」が速いほど、「握力」が高いほど認知症発症リスクが低下するということがらしい。オリンピックに感動するだけでなく、自らも日々定期的に適度な運動をしなければと思っています。(KT)

## ■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL [info@vec.gr.jp](mailto:info@vec.gr.jp)